

カラーラインの形成と「新移民」

——20世紀前半のアメリカ人種社会

中野 耕太郎

- 1 序章——「新移民」のアメリカ化と白人性
- 2 第一次世界大戦期の動員政策とカラーライン
- 3 人種の暴力と新移民
- 4 終章——1924年移民法体制とその後

1 序章——「新移民」のアメリカ化と白人性

かつて、フランスの歴史家ノワリエル (Gérard Noiriel) は次のように、近代史における移民問題の起源を記している。すなわち、移民問題は「世界を揺り動かした二つの『革命』が交わる点に位置する。第一の革命、それはもちろんフランス革命であり、これによって……国民と外国人とを対立させる根本的な分割によって特徴づけられる、国民国家の時代が始まった。第二の革命、それは産業革命である。……大工場の登場とともに、人間の移動は著しく加速し、はるかに大規模な様相を呈するようになった」と⁽¹⁾。ここで指摘されていることは、近代の到来という大きな歴史の転換の中で、国民国家の形成とグローバルな人口移動がほぼ同時に始まっていたという事実である。ノワリエルが言うように国民国家の誕生は、ほとんど必然的に、ある土地に住む人々を「国民」とそうでない人々 (外国人) とに分断するが、まさに同時代の資本主義経済の勃興——それは国民形成の動力源の一つでもあった——の中で、ますます多くの越境者、すなわち、「そうでない人々」が国境の内部に暮らすようになっていた。つまり、近現代の国民社会は、その始まりから移民をいかに内的に包摂するか、あるいは、外部者として排斥するかという課題とともに発展してきたといつてよい。こうした問題系は、フランスと同じく18世紀の「革命」で生まれた共和国であり、また、多様なヨーロッパ系、アフリカ系、アジア系等の人口を擁した「移民国家」たるアメリカ合衆国の歴史にも当てはまろう。

さらに、この国は他の欧米諸国と異なり、イギリス帝国の海外植民地としての出自を持つ。20世紀のアメリカは、開拓者植民主義 (settler colonialism) 特有の先住民虐殺の過去を引き摺り、また、大規模に行われた「不自由な」人口移動の負の遺産を抱えねばならなかった。17世紀に始

(1) ジェラルド・ノワリエル、大中一彌・川崎亜紀子・太田悠介訳『フランスという坩堝——19世紀から20世紀の移民史』法政大学出版局、2015年、xvi。

まる奴隷貿易はアフリカからアメリカに大量の奴隷を輸送し、最盛期には国内の黒人奴隷数は400万人近くに達した。さらに、南北戦争末期に奴隷制が廃止された後も、「苦力」(中国からの奴隷代替的な契約労働者)の導入というかたちで「不自由な」人流はなお維持されたのだった⁽²⁾。こうした歴史は、現代へと続くアメリカ国民社会に、独特のカラーライン(肌の色の違いによる境界線)を画定する前提となった。このアメリカの有色人差別は、20世紀に入り「アメリカ人」なるものが単に形式的な国籍の有無だけでなく、貧困や識字といった社会状態によって規定される「社会的な」国民国家の段階に至るや、ジム・クロウと呼ばれる人種隔離慣行として広く制度化されていった⁽³⁾。

このことは、「自由な」経済移民の国民化(あるいは排斥)という近代の大命題にとっても無関係ではありえなかった。なぜなら、20世紀転換期にアメリカに到来した「新移民」——すなわち、約1500万人の南・東欧系移民もまた、当時民族ごとに異なった「人種」と考えられ、彼らの貧しさや社会的孤立、そして、独自の生活習慣などは、その身体的、遺伝的特徴と一体のものとして見られていたからだ⁽⁴⁾。優生思想家のマディソン・グラントは彼らを見下し、「新移民の中には……地中海沿岸やバルカン半島の最底辺に生まれた、あらゆる人種の弱く打ちひしがれ、精神的に破綻した者たちが……大量に含まれている」と書いた⁽⁵⁾。こうした新移民に対する「人種偏見」は、リベラな社会改良家の間にも、広く認められるところである。20世紀初頭にシカゴのソーシャル・セトルメント(ハルハウス)を拠点に貧困撲滅の活動を行ったロバート・ハンターは主著『貧困』(1904年)で次のように貧困と新移民の「人種」とを結び付けていた。「多くのアメリカの巨大都市や産業都市の最貧地区では、貧者はほとんどの場合外国生まれである……。そうした移民街は、言語や習慣、諸制度において、アメリカ人の国民性ないし人種系統と全く分断されている」。さらにハンターはこう続ける。「これらの移民は、多くが文明の最下層から来たスラヴ系人種であり、……迅速にアメリカの影響に適応することがなく、おそらく改善の余地は全くない」、また「こうした最近の南・東欧移民のせいでアメリカ人の平均的な体格は劣化し、頭骨は短頭型に変わりつつある。加えて、人種混淆による心理学的な影響も懸念されている」と⁽⁶⁾。

実際、新移民は日常的に、アメリカ人やアメリカ化した旧移民(ドイツ系やアイルランド系)から人種的な劣者を意味する「ハンキー(Hunky)」(東欧系)や「デイゴ(Dago)」(イタリア系)といった蔑称を投げかけられる経験をしていた。彼らにとって、アメリカの国民社会に居場所を見

(2) 貴堂嘉之『アメリカ合衆国と中国人移民——歴史のなかの「移民国家」アメリカ』名古屋大学出版会、2012年。

(3) C. Vann Woodward, *The Strange Career of Jim Crow* (New York: Oxford University Press, 1955); Howard N. Rabinowitz, *Race Relations in the Urban South, 1865-1890* (New York: Oxford University Press, 1978); Grace Elizabeth Hale, *Making Whiteness: The Culture of Segregation in the South, 1890-1940* (New York: Pantheon Books, 1998).

(4) Gail Bederman, *Manliness and Civilization: A Cultural History of Gender and Race in the United States, 1880-1917* (Chicago: University of Chicago Press, 1995), p. 29.

(5) Madison Grant, *The Passing of the Great Race or the Racial Basis of European History* (New York: Charles Scribner's Sons, 1916), p. 80.

(6) Robert Hunter, *Poverty* (New York: Macmillan, 1904), pp. 261, 269-270.

つけ、自己尊厳を確立していく過程は、こうした被差別の境遇から抜け出すことでもあった⁽⁷⁾。第一次大戦期にシカゴで発行されたチェコ語新聞『デニ・ハラサテル』は、生みの親チェコ民族と育ての親アメリカの両方に忠誠を立てつつ、自分たちは、「ボハンクス（Bo-Hunks：ボヘミア人とハンキーの合成語）……と馬鹿にされる不当な恐怖」から逃れ「普通の人間」になりたいだけだとも書いていた⁽⁸⁾。そのように自らの「人種的」地位の不安定さに慄く移民大衆にとって、当時ますます厳格化しつつあったカラーラインの奈辺に自集団が位置しうるかは深刻な問題だったろう。ただそれは、ヨーロッパ系移民が積極的に有色人を差別することで「アメリカ化」し、主流社会への参入を果たしたという単純な同化物語に還元できるものではない。少なくとも1920年代までは、南・東欧系の新移民は言語的にも生活環境の面でも、凝集性のある集団（エスニシティ）を形づくり、社会的に孤立する傾向があったからだ⁽⁹⁾。

こうしたエスニック・コミュニティの形成、ないしは「エスニシティの創出（invention of ethnicity）」という論点は、社会構築主義の影響を受けた近年の移民研究が、トランスナショナルな人口移動の重要性とともに強調してきたものだ。それは、従来のナショナル・ヒストリーの同化論を相対化し、エスニックな集合性がむしろアメリカへの移民後に獲得されたこと、そしてこの新しい集合アイデンティティが数世代にわたって持続し、また、時に個々の移民のアメリカ化をうながす媒体ともなりえたことを明らかにした⁽¹⁰⁾。そうした、研究群を代表する記念碑的な作品として、1992年刊行のキャサリン・コンゼンヤルドルフ・ヴェコーリらによるフォーラム論文「エスニシティの創出——アメリカ合衆国からの展望」がある。この論文でコンゼンらが「エスニシティの創出」とその先にあるアメリカ主流社会への参入との関連で、移民とカラーラインの問題——新移民における白人性の構築——に言及していたことは見逃せない。やや長くなるが、該当箇所を抜粋しておこう。「(かつて) アフリカ系アメリカ人と不熟練職種の仕事を奪い合ったアイルランド人は、他の移民グループと同様に、“ホワイト・ニガー”というレッテルを貼られ、人種差別を自己認識の一部として内面化していた。ヨーロッパ系アメリカ人は、この約束の地で最悪の事柄は、“有色人種”であることだとすぐに学び、この余所者たちからできるだけ距離を置くようになった。エスニシティの創出もまたそのように機能した——すなわち、自集団をそうではないものによって

(7) David R. Roediger, *Working Toward Whiteness: How America's Immigrants Become White, The Strange Journey from Ellis Island to the Suburbs* (New York: Basic Books, 2005).

(8) Denni Hlastel, June 30, 1918, Chicago Foreign Language Press Survey, Federal Work Agency, Work Projects Administration, 1936-41, compiled by the Chicago Public Library Omnibus Project, 1942; Kotaro Nakano, "Preserving Distinctiveness: Language Loyalty and Americanization in Early Twentieth Century Chicago," *Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar, 2000* (2001), pp. 113-124.

(9) Victor Greene, *For God and Country: The Rise of Polish and Lithuanian Ethnic Consciousness in America, 1860-1910* (Madison: State Historical Society of Wisconsin, 1975); Ewa Morawska, *For Bread with Butter: The Life-worlds of East Central Europeans in Johnstown, Pennsylvania, 1890-1940* (New York: Cambridge University Press, 1985).

(10) Werner Sollors, ed., *The Invention of Ethnicity* (New York: Oxford University Press, 1989); See also, John Higham, edited by Carl J. Guarneri, *Hanging Together: Unity and Diversity in American Culture* (New Haven: Yale University Press, 2001).

定義したのである⁽¹¹⁾。」

このように移民がエスニック・アメリカンとなる過程の一部として白人性の構築を位置づける議論には一つのアプリアリな条件があった。それは多くの移民にとってカラーラインは、アメリカに来てから一定の期間をかけて学習された社会規範だという仮定である。例えばロバート・ゼッカーは、アメリカで発行されたスロヴァキア語新聞に掲載された黒人リンチ報道を網羅的に収集し、それらが新移民の読者に与えた影響を考察した。また、デイヴィッド・ロディガーとジェームズ・バレットは「人種的中間性 (racial inbetween-ness)」という概念を用いて、20世紀初頭の南・東欧移民の人種ステータスを白人性の獲得へと向かう一つの動態として捉えていた⁽¹²⁾。

しかし、そもそも移民は渡米前のヨーロッパでの生活の中で、本当に黒人を知らず、アフリカを知らなかったのかという疑問は残る。この点、近年の南イタリア移民の研究などは、移民がアメリカ特有の人種差別をシカゴやニューヨークで経験した事実を否定しないまでも、彼らが早くから白人としての意識を持っていたと指摘する。ナポリやシチリアからの移民にとって、アフリカは決して遠い土地ではなかったし、貧しい農村に生まれた彼らとて列強のアフリカ侵略や植民地支配のニュースと全く無縁ではなかったろう⁽¹³⁾。だが、それにもかかわらず、カラーラインを学習価値 (learned value) とする見方には一定の説得力があるように見える。管見のかぎり、ヨーロッパ移民のメディアや指導者は、当初、自集団以外の存在に無関心なことが多く、他方、同時代のアメリカ人観察者は、きまって新来の移民と黒人との良好な関係を記述していたからだ。だが、後述するとおり、遅くとも1930～40年代までには、新移民のほとんどが「白人の特権」を享受し始めていたように見える。我々はこの間の変化をいかなるものとして把握することができるだろうか。

ところで、コンゼンやヴェコーリ、ロディガーらの議論には、今一つの難点がある。それは、1970年代以来の「新しい労働史・移民史」の流れをくむ彼らが、あまりにも強く移民の自己認識にこだわりを見せる点である。それは、草の根の日常に暮らす人々の主体性を重視する一つの歴史観と言ってよい。しかし、名もない民衆の意識やアイデンティティを実証的に捉えるのは容易ではない。ましてや「人種」という社会スティグマを伴う、きわめてデリケートな領域について、移民自身が史料の中で語ることは稀である。こうした点を考慮して、新移民の白人化のプロセスを検討する本稿では、むしろ外的な強制力としての「暴力」の側面に注目して分析したい。戦争や社会紛争のような移民集団の外部から加えられる「力」がいかにか、彼らのアメリカ化 (国民社会への編入) を推進し、その人種的な地位を定めていったかという面にも視野を広げるべきだろう。具体的には、第1章で第一次世界大戦期の総力戦が新移民に与えた影響について考察し、第2章では戦争

(11) Kathleen Neils Conzen, David A. Gerber, Ewa Morawska, George E. Pozzetta, and Rudolph J. Vecoli, "The Invention of Ethnicity: A Perspective from the U.S.A.," *Journal of American Ethnic History*, Vol. 12, No. 1 (Fall, 1992), p. 14.

(12) Robert M. Zecker, "Let Each Judge: Lynching, Race, and Immigrant Newspapers," *Journal of American Ethnic History*, 29-1 (Fall, 2009), pp. 31-66; James R. Barrett and David Roediger, "Inbetween Peoples: Race, Nationality and the 'New Immigrant' Working Class," *Journal of American Ethnic History* 16-3 (Spring, 1997), pp. 3-44.

(13) Thomas A. Guglielmo, *White on Arrival: Italians, Race, Color, and Power in Chicago, 1890-1945* (New York: Oxford University Press, 2003); See also, Roediger, *Working Toward Whiteness*, Chapt. 4.

直後の時期、「赤い夏」と呼ばれた人種暴動の波を再訪する。最後に終章では、そうした総力戦と暴動の時代を経て、1920年代中葉に新たな移民法のかたちで一定の「秩序」が形成される過程を概観する。こうした検証を通じて、20世紀前半の移民問題とカラーラインについてその歴史的な意義を再検討したい⁽¹⁴⁾。

1 第一次世界大戦期の動員政策とカラーライン

(1) 移民の多元的統合

アメリカの第一次世界大戦は、これまで国民社会の周縁に捨て置かれてきた移民（外国人）や黒人、植民地人等に大きく依存したものであった。アメリカ政府が徴兵などを通して動員した外国籍の兵士数は約41万人（帰化市民を加えると50万人超）、黒人兵士の数は約36万7000人に及び、両者を合計すると戦時の米兵力の2割近くに達した。また、これとは別にアメリカ先住民や植民地のプエルトリコ島民も徴兵の対象となり、それぞれ1万2000人と1万8000人が従軍したのである。戦時のアメリカ政府は、これらの多様な「統治される人々」に対して大きく異なる対応をとり、そのことがその後の国民社会の在り方を大きく規定していくことになった。

1917年4月6日に対独宣戦を行った米国ウィルソン政権は、5月18日に選抜徴兵法を成立させ、初の全国的徴兵を実施した。同法の規定は帰化宣言を行った（帰化第一書類提出済みの）外国人も徴兵の対象としたので、戦時の米軍は大量の新移民を抱えることになった。ジョージア州のキャンプ・ゴードン（第82師団）で訓練を受けた兵士の2～5割はイタリア人と東欧ユダヤ人が占め、イリノイ州のキャンプ・グラント（第86師団）では約6,600人の非英語話者の兵士が暮らしていた⁽¹⁵⁾。

この問題に対する政府の基本的なアプローチは同化論によるものだった。「戦争の中で追求されるべき目的の一つは、混合的な人々をアメリカ化することである。」そのように米陸軍は宣言していた⁽¹⁶⁾。南・東欧移民の兵士は、最初から一般のアメリカ人兵士と同じ師団で訓練を受けており、陸軍省は1917年末まで、それぞれの基地にどれほどの規模で非英語話者が存在するかすら把握していなかった。その後、各基地では英語学習コースが設置されることになるが、キャンプ・ゴードンとキャンプ・グラントでは、いずれも3,000人の移民兵がYMCAの講師からこの共通語を学ん

(14) 以下の叙述に関しては、関連する既刊行の拙著の議論も参照されたい。拙著『戦争のつぼ——第一次世界大戦とアメリカニズム』（人文書院、2013年）、拙著『20世紀アメリカ国民秩序の形成』（名古屋大学出版会、2015年）、拙稿「第一次世界大戦と現代グローバル社会の到来——アメリカ参戦の歴史的意義」秋田茂・桃木至朗編著『グローバルヒストリーと戦争』（大阪大学出版会、2016年）。

(15) *The Official History of 82nd Division, American Expeditionary Forces: "All American" Division, 1917-1919* (Indianapolis: The Bobbs-Merrill, 1920), pp. 2-3; James J. Cooke, *The All-Americans at War: The 82nd Division in the Great War, 1917-18* (Westport, Conn.: Praeger, 1999); Commanding General, 86th Division, N. A., to the Adjutant General of the Army, 10565-8-1, RG 165, Military Intelligence Division (MID), NARA.

(16) *Infantry Journal*, Nov. 1918, p.436.

だ⁽¹⁷⁾。

ただし、戦時のアメリカ化は、必ずしも移民の「エスニシティ」を消し去ろうとするものではなかった。むしろ政府は戦争遂行のために多様なエスニック団体の支援を仰ぎ、特に戦争末期には外国語を用いた国内プロパガンダを本格化させてもいた。このことは、軍隊内にも当てはまり、訓練基地での移民兵の礼拝には、ユダヤ系福祉委員会やコロンバスの騎士団(カトリック)の奉仕が欠かせなかった⁽¹⁸⁾。また、キャンプ・ゴードンでは非英語話者のために、それぞれイタリア語とポーランド語を指揮言語とする250名規模の中隊が二つ実験的に組織されていた。もとよりこうした施策は新移民を文化的に隔離するものではなかった。基地内のシナゴークに通うユダヤ系兵士も「スラヴ中隊」のポーランド移民も、訓練後の夜間英語クラスの受講が義務づけられていたのである⁽¹⁹⁾。

(2) 黒人の戦争

黒人にとっての第一次大戦の経験は、ヨーロッパ系の新移民のそれとは大きく異なった。アメリカの参戦直後から、黒人の主要団体は、W・E・B・デュボイスを中心に、戦争政策に協力する立場をとった。17年5月に出された「黒人戦争会議」決議は、「過去の不幸な歴史にもかかわらず……人種と肌の色による障壁のない、民主主義の偉大なる希望は……連合側にあると熱烈に信じよう。……この国は、リンチを行い、黒人の選挙権を奪い、人種隔離を推進するような連中よりも、我々の側に属する(のである)」と宣言していた⁽²⁰⁾。

だが一方で、アメリカ白人の間には黒人の戦争参加に否定的な立場が広く存在した。特に南部では黒人の徴兵を忌避する傾向が強く、この点を『ニュー・リパブリック』誌は記事「黒人の徴兵」で次のように報じていた。「プランテーションの規律以外のものに慣れていない、欲望に満ちた若い黒人たちが大量に動員拠点に集まることは、当然のことながら懸念の対象となる。だが、南部を最も悩ませているのは、戦争から戻った黒人兵士が他の黒人に与えるであろう影響だ。……黒人兵は新たな独立意識を身につけて帰還し、民衆の不安を煽ることになるのではないかと⁽²¹⁾。このような、地元住民からのパラノイ德的な反応は、ヨーロッパ移民の徴兵・軍事奉仕については全く起こっていない。

こうした「国民感情」を背景に、陸軍参謀本部は黒人兵への訓練は最小限とし、主として労働力として使役すること、そして師団の編成は人種別とすることなどを条件に黒人の徴兵実施を勧告し

(17) "3000 Gordon Men Learning English," *Trench and Camp* (Camp Gordon), Vol. 1, No. 24, March 18, 1918, p. 1; "Soldiers of Foreign Birth Learn English," *Trench and Camp* (Camp Grant), Vol. 1, No. 19, Feb. 11, 1918, pp. 1, 4.

(18) Christopher M. Sterba, *Good Americans: Italian and Jewish Immigrants during the First World War* (New York: Oxford University Press, 2003).

(19) *Infantry Journal*, Sept. 1918, pp. 252-254; "Camp Gordon Plan," *Americanization Bulletin*, Vol. 1, No. 2 (Oct. 15, 1918), pp. 8-9; "Camp Slav and Italian Units Are Determined to Get the Hun," *Trench and Camp* (Camp Gordon), Vol. 1, No. 39, July 1, 1918, p. 2; "The Camp Gordon Plan," *Trench and Camp* (Camp Grant), Vol. 1, No. 52, Sept. 30, 1918, p. 3.

(20) *The Crisis*, Vol. 14, No. 2 (June, 1917), p. 59.

(21) "Negro Conscription," *New Republic*, Vol. 12, No. 155 (October 20, 1917), pp. 317-318.

た⁽²²⁾。この黒人の人種分離軍団は、米軍全体の構成の中でも特異なものといえた。ひとり、先住民については写真家のジョセフ・ディクソン等、部族文化の保存を求める勢力が独自の軍団形成を主張したが、結局、白人兵士と混合した統合軍方式が採用された。連邦インディアン局を中心とする同化論（市民化論）が押し切ったかたちであった⁽²³⁾。第一次大戦期には、軍事奉仕が同化の機会をもたらした。新たな国民形成をうながすという考えが広く共有されたが、黒人はその例外だったのだ。

このことをさらに明確に示したのが、黒人に対する暴力の連鎖であった。なかでも1917年7月に起こったイリノイ州イースト・セントルイス市の人種暴動は深刻だった。それは、同市の白人住民が、軍需生産のために移住してきた黒人労働者のコミュニティを襲撃した事件で、150名が殺され、6,000人が家を焼かれた。黒人女性作家のアイダ・B・ウェルズは現地の惨状を次のように伝えている。暴徒が「私たちの赤子を蹴り殺しにし、私たちの上品な紳士を木に吊るし、女性たちを襲い、家を焼き、傷ついた人々をその炎の中に投げ入れた……アメリカの人種偏見は黒い肌のアメリカ人を劣等な地位に据え置き、彼ら黒人は生命、自由、幸福追求の平等な機会を求めたその時に、リンチを受け、生きながら焼かれ、投票権を奪われ、虐殺された」と⁽²⁴⁾。

これに対して、戦時政府は事件の隠蔽を第一とした。国立公文書館に残された資料によると、陸軍情報部がアイダ・B・ウェルズの身辺調査を始め、彼女の著作をファイルしていたことがわかる。一方、事件の真相は不明な点も多い。研究者の中には、暴徒に南・東欧系の名を持つ者が加わっていたと示唆するものもいるが、今もって実態は明らかではない⁽²⁵⁾。ただ次のことだけは言えるだろう。もし、この暴挙の報に触れた東欧移民がいれば、黒人がアメリカで受ける差別が、自分たちが低賃金の不熟練労働に押し込められ、「ハンキー」と蔑まれる屈辱とは、桁違いの暴力性を帯びているという事実を痛感したはずだ。そして、戦後も黒人に対する民間暴力は、ますますエスカレートしていく。次章で見る、1919年の「赤い夏」に続き、1921年のタルサ（オクラホマ州）では、再び黒人居住区全体が破壊され、150名以上が殺害される惨事が起こっている⁽²⁶⁾。

(3) ブラックフェイス

このヨーロッパ移民と黒人の戦争体験にみられる著しい非対称は、移民の白人性の構築とおそらく密接にかかわっている。戦時の大衆文化は、このことを示すもう一つの領域である。ただし、大衆文化と言っても、ここで注目するのは政府機関の訓練基地活動委員会（Commission on Training

(22) Memorandum, Maj. Gen. Tasker H. Bliss for the Secretary of War, 24 August, 1917, 8142-150, RG 165, MID, NARA.

(23) Thomas A. Britten, *American Indians in World War I: At Home and at War* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1997); Susan A. Krouse, *North American Indians in the Great War* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2007).

(24) Ida B. Wells-Barnett, *The East St. Louis Massacre: The Greatest Outrage of the Century*, (Chicago: The Negro Fellowship Herald Press, 1917), pp. 21-23.

(25) Linda O. McMurry, *To Keep the Waters Troubled: The Life of Ida B. Wells* (New York: Oxford University Press, 1998), pp. 317-320; Charles L. Lumpkins, *American Pogrom: The East St. Louis Race Riot and Black Politics* (Athen, OH: Ohio University Press, 2008), p. 118.

(26) *Tulsa Race Riot: A Report by Oklahoma Commission to Study the Tulsa Race Riot of 1921* (Feb., 2001) accessed Dec., 6, 2021. <https://www.okhistory.org/research/forms/freport.pdf>.

3,000 GORDON MEN LEARNING ENGLISH

**Foreign-Speaking Men Being
Taught Patriotism — Many
Learn to Read and Write.**

"This is an American flag. It has forty-eight stars, because there are forty-eight states in the United States. Every true American loves the flag. Every soldier salutes it."

This is a part of one of the lessons in English that nearly 3,000 Camp Gordon soldiers are receiving from four to six times a week. Few large cities have made better provision for the education of their foreigners than has Camp Gordon. Yet the elaborate school system of the camp is the product not of long years of experiment, but of the desperate military necessity of the moment. There are no school buildings, no salaried superintendents or teachers. But there is something better—the whole-hearted co-operation of the central committee on education, the scores of non-coms and privates who act as teachers, and the thousands of pupils.

Early in the history of the camp it became evident that maximum military efficiency could not be attained until the hosts of foreign-born soldiers could be taught to speak and understand English. Accordingly, a central committee was appointed, consisting of Major G. E. Buxton, chairman; Professor Ulrich B. Phillips, of the Y. M. C. A., recorder; Major L. B. Lee, and Chaplain John Paul Tyler, 325th infantry. A divisional order made attendance at the company English schools compulsory. Teachers

Directors of Gordon Minstrels



On the left is Bandmaster John Pugeliese, of the 320th Field Artillery band, and on the right is Fred Trust, president of the Camp Gordon Army Entertainers' league. Bandmaster Pugeliese was in charge of the music and Trust directed the members of the big blackface minstrel presented by camp players at the Liberty theater last Friday night.

写真1 *Trench & Camp* 誌 (Camp Gordon : 1918年3月18日付) に掲載された minstrel の記事。左側に英語クラスの紹介が見られる。

Constitution Panshots of Gordon Minstrel



写真2 *Trench & Camp* 誌 (Camp Gordon : 1918年3月18日付) に掲載された minstrel 公演を紹介する挿絵。同誌の発行に協力した地元新聞 *Atlanta Constitution* の漫画家による。

Camp Activities: CTCA) が、協力団体の YMCA (Young Men's Christian Association) を媒介して兵士に供給した官製の娯楽のことである。YMCA は主要な基地の文化活動を取り仕切り、週刊の広報誌を発行してその概要を発信していた。例えば、大量の南・東欧系移民が在籍したキャンプ・ゴードンの広報誌 (*Trench & Camp*) は、1918 年 4 月には、6,000 人の訓練兵が地元アトランタの市民と合同で、戦時国債販売促進の大パレードを行ったことを伝え、6 月の誌面ではアトランタのユダヤ人コミュニティから約 30 人の子供たちが慰問で基地を訪れたと報じていた⁽²⁷⁾。そうした、無数の広報記事の中に、いわゆるブラックフェイス・ minstrel に関するものが含まれたことは興味深い。

写真 1 と写真 2 は 1918 年 3 月 18 日付の *Trench & Camp* の誌面の一部で、3 日前の 15 日金曜夜に行われた「ビッグ・ minstrel」公演の成功を伝えている。minstrel とは伝統的な大衆劇の一種で、顔を黒塗りにした白人の役者が、黒人の姿態をコミカルにまねて笑いをとる「白人」観衆のための娯楽である。このキャンプ・ゴードンの minstrel 公演では、演者も 1,600 人に及ぶ観客も、現役の訓練兵である。例えば、写真 1 の中央に並ぶ男性の左の人物は、公演当日の音楽責任者で、イタリア人姓のプラグリエーセを名乗る第 320 砲兵隊の軍楽隊長だった。講演後、「第 82 師団全体から文句なしの推薦を受けた」ショーは、3 週間後の 4 月 6 日に再演されることになり、YMCA 役員のクラレンス・アレンの列席も伝えられた⁽²⁸⁾。

かつて、19 世紀のブラックフェイス・ minstrel とアイルランド系移民の白人性について論じたのは、前出のデイヴィッド・ロディガーであった。ロディガーは主著『白人性の報酬』の中で、しばしば移民労働者によって演じられた minstrel は、「黒塗りという単純な物理的変装と巧みな文化的偽装ゆえに、演者たちが真に白人であること、そして白人であることが本当に重要であることを強調した」と指摘した。さらに彼はこう続ける、「黒塗りの下にある共通の白さこそが重要なことから、minstrel は、移民排斥のヒステリーが起きていた時期でさえも、驚くほどの民族的多様性を育むことができた」つまり、「多様なエスニック、地域の諸文化はこの黒塗りに——すなわち、究極的には空虚な白人性のうちに、清算可能だったのだ」と。いわば移民の同化とエスニシティの創出、そして白人性の獲得の結節点として、この大衆娯楽を見る立場であった⁽²⁹⁾。

このロディガーの議論をそのまま第一次大戦期の官製 minstrel に当てはめられるかどうかはなお検討の余地があろう。だが、全米の訓練基地でも最多の移民兵を擁したキャンプ・ゴードンの minstrel 公演で、観客の中に無数の南・東欧出身者が含まれたことは容易に推察できる。当時なお、「ボハンクス」などと罵られ、人種的地位の不安定さを感じていた新移民が、「黒塗り」の笑いを観客として消費し、自らの「共通の白さ」を確認したであろうこともまた想像に難くない。こうした、ブラックフェイス・ minstrel は移民兵が在籍した他の基地でも上演されていた。シカゴの徴兵を受け入れ、約 6,600 人のヨーロッパ移民兵が在籍したキャンプ・グラントの記録にも、

(27) *Trench and Camp* (Camp Gordon), Vol. 1, No. 26, April 1, 1918, p.15 ; *Ibid.*, Vol. 1, No. 37, June 17, 1918, p. 5.

(28) *Trench and Camp* (Camp Gordon), Vol. 1, No. 24, March 18, 1918, pp. 1, 11 ; *Ibid.*, Vol. 1, No. 26, April 1, 1918, p.13.

(29) David R. Roediger, *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class* (New York: Verso, 1991), pp. 117-118.

YMCA が同種の minstrel 公演を行ったことが記されている⁽³⁰⁾。繰り返しになるが、これらの基地内の「文化活動」は、CTCA が管轄する、広い意味での「アメリカ化」政策の一環でもあった。キャンプ・ゴードンの広報誌(写真1)を再び見てみよう。minstrel 公演の功労者でイタリア系と思しき軍楽隊長 プグリエーセの写真の左側に、「3,000 人のゴードンの兵士が英語を学んでいる——外国語話者の兵士が愛国主義を教えられている」という見出しの記事があることに気付く。おそらく、minstrel の娯楽を享受した移民兵の多くは、米軍内の英語化プログラムの履修者でもあっただろう⁽³¹⁾。

2 人種の暴力と新移民

(1) 1919 年の暴動

冒頭でも触れた、ナショナリズムの高揚と大規模な人口移動の同時性という近代史が背負った宿命は、第一次世界大戦とその直後の時期に最も鮮明に顕在化した。そして、そのことが惹起した「恐怖」が世界各地に民族浄化や住民交換などの獐猛な暴力を拡散していったことは周知のところであろう。アメリカの場合は戦時体制の要請から、50 万人から 70 万人と言われる南部黒人が北部の大都市、産業拠点に移住するという、かつてない人流が旧来の社会秩序を強く動揺させていた。そして、戦争直後の 1919 年夏、ヨーロッパ戦線からの帰還兵を含む都市の黒人は、生活空間をめぐって白人住民と激しく争うことになる。この数カ月間だけで、25 の都市で人種暴動が勃発し、かかる騒擾の沈静化は大きな社会的、政治的課題となった。このことが、現代アメリカのカラーライン形成と深く関わったことはいまさら言うまでもない。

ここで、新移民の「人種」を論じる本稿が取り上げたいのが、1919 年 7 月末に始まるシカゴ人種暴動である。38 名の死者、537 名の負傷者を出したこの出来事は、同時期に起こった一連の擾乱の中で最大規模のものであり、市内の広範囲にわたる地域が「戦場」と化したことも特筆すべきであった。また、シカゴでは暴動鎮圧後にイリノイ州知事が任命した人種関係委員会(Chicago Commission on Race Relations: 以下 CCRR と略記)なる平和構築機関が設置され、原因究明のための詳細な現地調査を行った。この調査報告書のおかげで、今日、第一次大戦直後の全米を覆った人種間暴力の実相がある程度明らかになっている⁽³²⁾。

さらに重要なことであるが、当時のシカゴは総人口 270 万人のうち、約 3 割にあたる 80 万人を外国生まれが占め、その子供世代(両親のいずれかが外国人)の人口は優に総人口の 7 割を超える 194 万人に達していた。加えて、外国生まれの人口のうち約 38% がスラヴ系移民であったことがわかっており、これにもう一つの大集団だったイタリア移民を加えるとその数はおそらく全外国人の

(30) History of the 86th Division by Lieut. Jack Little, 286-11.4, RG 120, American Expeditionary Forces, Box 1, NARA.

(31) *Trench and Camp* (Camp Gordon), Vol. 1, No. 24, March 18, 1918, p. 1.

(32) The Chicago Commission on Race Relations, *The Negro in Chicago: A Study of Race Relations and A Race Riot* (Chicago: University of Chicago Press, 1922).

半数近くに及んだだろう。まさにシカゴは「新移民の都市」であった⁽³³⁾。そして、各種の記録は1919年の暴動時に、これら新移民の居住地区の近くで暴力事案が発生しており、直接暴動に巻き込まれた移民がいたことを示している。こうした外国系人口の分布や騒擾への移民の関与は他の北部都市にも類似するものがあり、シカゴ暴動の記憶は、単なる個別事例の域を超え、アメリカの全体史を語りうる力を持っている。

さて、人種暴動が勃発した当時、シカゴでは戦時下に北上した約6万人の黒人労働者の住居問題で著しく緊張が高まっていた。サウスサイドの伝統的な黒人街は、移住者が流入したため人口過密となり、住環境の悪化を嫌った黒人中産階級の一部が近隣の「白人地区」に転出し始めたからだ。そんな中、ミシガン湖畔のビーチで、ある黒人少年が溺死した事件をきっかけに白人と黒人の住民間の紛争が一気に爆発した(7月27日)。翌日には白人のストリート・ギャングがサウスサイドの人種混住地域の黒人を襲撃し、事態はますます深刻化する。さらに29日には同胞の少女が黒人に射殺されたというデマを信じたイタリア移民が、たまたま通りがかった黒人(ジョゼフ・ラヴィング)を集団で惨殺する事件が起こった。その後、騒擾は一時沈静化するが、8月2日には、ポーランド系やリトアニア系の食肉労働者が暮らすバックオブザヤーズ地区が、何者かによって放火され全焼した。暴動は、最終的にイリノイ州軍によって鎮圧される8月8日まで続いた⁽³⁴⁾。以上がシカゴ暴動の概要であるが、それでは、北部の都市に新たにカラーラインを画定するこの混乱の中で、南・東欧移民はどのような役割を果たしたのであろうか。またそのことは、彼らのアメリカ化(国民社会への包摂)とその人種・民族的な地位の問題にどのような影響を与えたのだろうか。今一度検討する必要があるだろう。

(2) 新移民と黒人

ところで、そもそも暴動以前に南・東欧移民と黒人住民はいかなる関係を築いていたのか。そのことを示す移民側、黒人側の史料は驚くほど少ない。そして、新移民と日常的に接した第三者たるセツルメント・ワーカーらの観察は、総じて両者の良好な関係を示唆するものだった。あまりにも有名な史料であるが、ジェーン・アダムズの『ハルハウスの二十年』がイタリア系移民に触れた次の一節を引いておこう。「確かに彼ら(地中海移民たち)は、アングロサクソンに比べて肌の色の区別をあまり意識していませんが、それはカルタゴやエジプトに伝統的に親しんできたせいかもしれません。彼らは、リンカーンの誕生日にハルハウスで行われた(W・E・B・)デュボイス教授の学術的な講演を尊敬と熱意をもって聞いていましたし、肌の色が不条理に強調する人種の違いは全く意識していなかったようです……」⁽³⁵⁾。

このようなカラーラインへの「無頓着」は、東欧移民にも当てはまると考えられた。サウスサイ

(33) City of Chicago, Department of Development and Planning, *The People of Chicago: Who We Are and Who We Have Been, Census Data on Foreign Born, Foreign Stock and Race, 1837-1970* (1976).

(34) William M. Tuttle, Jr., *Race Riot: Chicago in the Red Summer of 1919* (Urbana: University of Illinois Press, 1996).

(35) Jane Addams, *Twenty Years at Hull-House: With Autobiographical Notes* (New York: McMillan, 1910), p. 183.



写真3 黒人と白人の子供が一緒に遊んでいる様子。CCRR, *The Negro in Chicago* より。

ドのシカゴ大学セツルメントのメアリー・マクダウェルは後年（1927年）、こう回想している。「スラヴ系諸民族の中では黒人に対する何らかの敵意は非常にゆっくりとしか育っていませんでした……外国生まれにとって、肌の色は同じ政治、産業エリアに暮らさざるをえない人々を分かち固定的な境界線ではありませんでした。カラーラインはネイティブのアメリカ白人によって引かれたものと見てよいでしょう」と。さらにマクダウェルは暴動の最中にも、顔見知りのスロヴァキア人少年が逃げ惑う黒人を助けたのを見たと言い、「私のポーランド系の隣人が暴力に加担しなかったことは明白です」とも記していた。要するに「我々の自家製の人種偏見が外国人の子供たちに影響を与えたのであり、このアメリカの強迫観念は移民が持ってきたものではない」というのが、彼女の結論だった⁽³⁶⁾。

同じように新移民が人種偏見において無垢であったという見方は、シカゴ人種関係委員会（CCRR）の調査報告書にも散見される。CCRR報告は、黒人と白人の子供が遊ぶ写真を何枚も掲載し（写真3）、シカゴ市内の「調和のとれた近隣」の例として、シチリア移民と黒人が混住するノースサイドを取り上げている。曰く、「この地区では多数を占めるシチリア人とその黒人の隣人の関係は友好的である。シチリア人と同じテナメント（アパート）で平和裏に暮らしている黒人もいるし、子供たちは一緒に遊んでいる。シチリア人の雑貨屋で買い物をするために、移民の子供からイタリア語のフレーズを習っている黒人の子供もいる」と⁽³⁷⁾。同報告は、イタリア移民と黒人の関係は、暴動時に著しく緊張したが、「喧嘩が終わった直後には、再び両者の関係は改善された」とし、ラヴィング殺人事件についても極限状態の流言飛語が生んだパニックの結果であったと強調する。しかし、現場近くでこの事件を観察したジェーン・アダムズは、暴力によって何かが変わってしまったことをCCRRの公聴会で証言した。CCRRの要約によると、その内容は次のとおりで

(36) Mary McDowell, "Prejudice" in Caroline Miles Hill, *Mary McDowell and Municipal Housekeeping: A Symposium* (Millar Publishing Co., 1938).

(37) CCRR, *The Negro in Chicago*, p.113.



写真4 シカゴ暴動を伝える1919年8月1日付、*Dziennik Chicagowski* 紙（ポーランド語新聞）。Courtesy of the Polish Museum of America.

あった。「暴動の前、イタリア人は特段黒人に対して反感を持っていなかった。この地区の住民は南イタリアの出身者が多く、肌の色の黒い諸人種に慣れていたのであろう。ただ、彼らは黒人を嫌い始めている。暴動後、9月になっても……近隣は荒廃しきったままで」と⁽³⁸⁾。

CCRRは、暴動後半に起こった東欧移民街（バックオブザヤーズ）の放火事件についても、詳細な調査に基づき明快な結論を出していた。すなわち、8月2日未明に起こったこの事件の首謀者は、アイルランド系アメリカ人ギャングのリーガン・コルツ団で、彼らは顔を黒塗りして黒人の犯罪を装い、貧しいリトアニア人が多く住む一角に火をつけたと。放火の動機が東欧移民の黒人への敵愾心を煽り、報復をうながすことであったのは疑いない。しかし、そうだとすると、リトアニア人やポーランド人をはじめとする東欧系は、それまで暴動に参加していなかったということになるか⁽³⁹⁾。

事実、ポーランド移民の暴動への関心は決して高くなかった。写真4は放火事件前日のポーランド語新聞『日刊シカゴ』（*Dziennik Chicagowski*）の1面である。「最終手段」と題された漫画のセンスは興味深い。銃を撃ち合う黒人と白人に「人種のボグロム」というキャプションが付き、この紛

(38) CCRR, *The Negro in Chicago*, p. 19.

(39) CCRR, *The Negro in Chicago*, pp.12-16.

争全体をハエたたきを模した州軍で叩き潰そうとするものである。全く他人事のような冷ややかさ——この図像の一体どこにポーランド語新聞の読者は立ちえようか。また、この紙面全体の大見出しが「路面電車ストは今日で終結」であるのも驚かされる。人種暴動は、公共交通機関のストライキほどの重要性もなかった。注意を要するのは、「人種的ポグロム」という言葉遣いである。実は、第一次大戦直後の、新生ポーランドではナショナリズムの高揚からユダヤ系住民への虐待(ポグロム)が拡大し、アメリカの政府や知識人からも批判を受けていた。アメリカ自身が「人種的ポグロム」に墮してしまったという指摘は、ある種の意趣返しなり、自己正当化のニュアンスがある。いずれにせよ、こうしたポーランド語新聞の報道姿勢には、現下の人種暴動に対して、ほとんど当事者性が感じられない。だがしかし、ミンストレルの役者のように顔を黒塗りした放火犯が期待したのは、この東欧移民たちが「白人」として参戦することであった。その意味で、移民自身の意思に関係なく、彼らはすでにカラーラインの白人側に組み入れられつつあったと言ってよからう⁽⁴⁰⁾。

(3) 分けるという平和

シカゴ人種関係委員会(CCRR)は、最終報告書を提出する1921年12月まで丸々2年にわたって暴動後の平和構築に尽力した。それは、CCRRに関わった黒人中産階級やアダムズらのセツルメント・ハウス、シカゴ都市連盟(黒人移住者の産業社会への適応を支援するタスキギー系の運動体)などの長い交渉の過程でもあった。その中で一つの妥協点として見いだされたのは、「強制的ではない」人種分離と黒人地区内の再開発であった。実は、暴動の再発防止のために両人種が自由意思で居住区を分けるという発想は、早い段階から存在した。すでに、事件直後の大陪審報告は「自発的隔離(voluntary segregation)」を推奨しており、また、これを報道した一連の新聞記事は「協定による人種分離(separation by agreement)」と書き立てた⁽⁴¹⁾。その後、設立されたCCRRは基本的に人種統合路線であったが、再び黒人住民に対する暴力事案(爆弾事件)が続発するようになる1920年2月頃、方針の転換があったように見える。当時、CCRRの委員長代理、フランシス・シェパードソンは、「黒人はシカゴ中に散らばりたいのではない。彼ら(中産階級の黒人)は清潔な場所を求めているのだ。彼らの居住区を奇麗にする方法を考えるのは我々次第だ」と公言し、シカゴの平和維持のための、「知的隔離(intelligent segregation)」を強く求めたのである⁽⁴²⁾。CCRR最終報告書には、さすがに「自発的隔離」や「知的隔離」という文言は出てこないが、黒人中産階級への見苦しくない住宅供給ばかりを強調する内容となった⁽⁴³⁾。

忘れてならないのは、こうした「事実上の(de fact)」居住区人種隔離は、きわめて多くのリベラルが必要悪として要請したものだだったことだ。例えば、作家カール・サンバークがシカゴ暴動を取材した著書に、ウォルター・リップマンが寄せた序文は、今読むと衝撃的ですからある。すなわ

(40) *Dziennik Chicagoski*, August 1, 1919, p. 1; See also, Pacyga, *Polish Immigrants and Industrial Chicago: Workers on the South Side, 1880-1922* (Columbus: Ohio State University Press, 1991), Chapt.6.

(41) Final Report of the August 1919, Grand Jury, p.3, CCRR Papers, Illinois State Archives; "Riot Jury Urges Race Separation by Agreement," *Chicago Daily Tribune*, November 5, 1919, p. 12.

(42) "Rebuild Black Belt, Plan of Race Board," *Chicago Daily News*, February 25, 1920, p. 3.

(43) The CCRR, *The Negro in Chicago*, pp. 640-651.

ち、「混ざり合うことは黒人にとっても白人にとっても望ましくないのだから、理想は人種並行論 (race parallelism) とでも呼ぶうるものの中に見える……黒人にとって、共通文明のあらゆる機構に完全にアクセスできるが、白人の天国と漂白された天使の夢を見なくてすむような関係、そんな関係を我々は黒人との間に築かねばならない」と⁽⁴⁴⁾。

以上のような暴動後の議論の果てに、1920年代後半から、人種抑圧的な不動産制限約款 (restrictive covenants) の慣行が蔓延した事実は看過することができない。不動産制限約款とは、ある区画内の一定比率以上の住民の参加を条件に、「望ましからざる」転入希望者に住宅を売却しないと誓い合う契約行為である。この黒人排除の不動産慣行は、シカゴ市域の4分の3をカバーし、西海岸のロサンゼルスやシアトルからワシントンDCまで全米の各都市に広がっていった。この制度は、1926年に最高裁から合憲判決を受け、1930年代、ニューディールの住宅政策 (住宅所有者資金貸付公社:HOLC等) にも引き継がれていく⁽⁴⁵⁾。そしてこの間、南・東欧由来の新移民が、「制限」にかかることはなかった。当時、イタリアン・マフィアのボス、アル・カポネが、シカゴ南部の郊外パーク・マノーにイタリア語しか話せない実母の家を購入した際、彼女が人種制限約款に署名し、「白人」の街の住人になったという話は、今や広く知られるところであろう⁽⁴⁶⁾。

4 終章——1924年移民法体制とその後

(1) 出身国別割り当て移民法 (1924年) と新移民

これまで見てきたように、第一次大戦の総動員と戦後の動乱を経て、北部都市を含む全国的なカラーラインが新たに構築されていった。その過程で、新移民は「そうではないもの (有色人)」と差異化され、「白人」の世界に参入し始めたように見える。しかし、だからと言って、彼らが「ハンキー」や「デイゴ」への偏見から直ちに解放されたわけではない。1920年代に再び排外主義が猛威を振るう中で、新移民の「人種」的劣等性を喧伝する言説もまた再燃する。この時期、「アメリカ人」を一つの筋筋だとする国民国家観が一般に受容されており、そこからアメリカ人口の構成要素としての「出身国 (national origin)」という新たな血統概念が創出された⁽⁴⁷⁾。それはチェコ人やポーランド人を一つの「人種」と考え、ステレオタイプ化する心的習慣に符合するものだった。1921年には、まさに南・東欧移民を制限する目的から、1910年を基点とした「出身国」別の移民割り当て制度がはじめて試みられた。さらに、1924年には、優生学者ハリー・ラフリン等が議会に影響力を行使する中で、1890年を基点とするより厳格な出身国別割り当て移民法が作られた。ラフリンは、犯罪や依存といった「社会的墮落」がその人種的資質ゆえに、南・東欧移民に突出し

(44) Walter Lippmann, "Introductory Note," in Carl Sandburg, *The Chicago Race Riots, July, 1919* (New York: Harcourt, Brace and Howe, 1919) pp. xix-xxi.

(45) *Corrigan v. Buckley*, 271 U.S. 323 (1926); Roediger, *Working toward Whiteness*, pp. 224-234.

(46) Thomas Lee Philpott, *The Slum and the Ghetto: Neighborhood Deterioration and Middle-Class Reform, Chicago, 1880-1930* (New York: Oxford University Press, 1978), p. 199.

(47) Mae M. Ngai, "The Architecture of Race in American Immigration Law: A Reexamination of the Immigration Act of 1924," *Journal of American History*, Vol. 86, No. 1 (Jun. 1999), pp. 67-92.

て多いと公言する人物であった⁽⁴⁸⁾。1924年移民法には、他にも特筆すべき点があった。一つは、日本人をはじめとするアジア移民を「帰化不能外国人」という別の基準で排斥したこと。今一つはメキシコ人など西半球からの移民を無制限としたことである(ただし、同年、合衆国国境警備隊が創設され、書類のない入国者の「犯罪者」化も始まった)。

この間の新移民側の対応は、シカゴ選出の下院議員、アドルフ・サバスの動きから類推できる。サバスは南ボヘミアのザーボジエのユダヤ人家庭に生まれ、15歳で渡米してきた移民で、シカゴのユダヤ人、チェコ人のコミュニティを代弁する政治家だった。彼は1921年法の時点から、「割り当て制度」に強く反対しており、この立場は、1924年4月の下院での論戦でも一貫していた。サバスは言う。新移民を差別する同法案は「根拠を欠いた……疑似科学というほかないもので、ジャーナリスティックな想像力による捏造にすぎない」と。ただし、彼の議会での主張をつぶさに追うと、こうした優生学批判だけでなく、「他の人々」への言及が多いことにも気付かされる。過去1年間に北部に「移住した黒人労働者は、47万8700人に達する」という調査結果を引き合いに出して、もし移民制限法案が通れば労働力不足から黒人の北上に拍車がかかると示唆したり、メキシコ移民について「望ましからざる階級——同化不能で我が国の脅威になるとされる」と発言している。また、日本移民の排斥条項に関しては、あくまで西海岸選出の議員の話としながら、「カリフォルニアが日本人に奪われてしまう恐怖」に言及して、これに賛同する姿勢を示した⁽⁴⁹⁾。結局のところ、新移民の議会指導者にできたことは、有色の他者、すなわち「そうではないもの」を貶めることで、「白人性の報酬」を期待することぐらいだった。5月末、移民法案は成立し、イタリア移民の年間割り当ては3,854人、ポーランド移民も5,982人に制限されてしまう。新移民に劣者の烙印が押されたも同然であった。

(2) アメリカ化の人種的含意

しかし、ある種の逆説とも言えるが、その後、新移民に対する「人種差別」は急速に減退していった。包括的な移民制限法の実現は、アメリカ社会から「移民問題」という歴史的な危機を消し去った。また、1929年に始まる大恐慌は、多くのエスニック・ビジネスや移民の互助団体を破綻させ、新移民の二世世代はアメリカの制度の中で育つことになる。わけても、多様な不熟練職種を組織したCIO労働組合への加入とこれを通じた民主党・ニューディール政治への参加は、移民の国民的統合に計り知れない機会となった⁽⁵⁰⁾。さらに第二次世界大戦期の二度目の総力戦は、新移民のアメリカ化をいよいよ完成させていく。とりわけ、反ナチスの国民的な運動は、南・東欧系とア

(48) *Hearings: Analysis of America's Modern Melting Pot* (House Committee on Immigration, 67 Cong., 3 Sess., 1923).

(49) *Immigration: Speeches of Hon. Adolph J. Sabath of Illinois in the House of Representatives, April 4 to May 15, 1924* (Washington DC: Government Printing Office, 1924), pp. 3-7, 20, 35, 38, 69-76; *Congressional Records, 68th Congress, 1st sess., House of Representative*, April 5, 1924, pp. 5662, 5681; See also, Gary Gerstle, *American Crucible: Race and Nation in the Twentieth Century* (Princeton: Princeton University Press, 2001), Chapt., 3.

(50) Lizabeth Cohen, *Making a New Deal: Industrial Workers in Chicago, 1919-1939* (New York: Cambridge University Press, 1990).

メロカ白人の関係をより近しいものとした。ホロコーストの事実が明るみに出るとつれ、ヨーロッパ人内部の「人種差別」は、学問的にも政治的にも明確に拒絶されるようになっていく⁽⁵¹⁾。リトアニア生まれのユダヤ人で被服労働者（CIO 副委員長）だったシドニー・ヒルマンが政府の戦時生産、労働管理の責任者となったことは、この間の南・東欧移民の地位向上を象徴するものであった⁽⁵²⁾。

以上本稿では、南・東欧系の新移民の「人種」がどのように形成され、変容していったかという問題を、主として外的な強制力としての「暴力」に注目しながら考察してきた。まず検討したのは、第一次大戦期の国家暴力とカラーラインの関係であった。続いて、戦後の人種暴動を惹起した民間の自警的暴力と秩序再生のための平和構築という視角からこの問題を考えた。さらに1920年代中葉まで射程を広げ、「出身国別」割り当て移民法という法治の暴力にも短く言及した。このような角度から光を当てたとき、新移民の白人性の構築やハンキー・ステレオタイプからの脱却は、必ずしも移民自身が日々の暮らしの中で、主体的に選び取れた何かではなかったように思われる。ノワリエルが看破した国民国家の誕生と巨大な人口移動の同時性（あるいは相補性）——そして、それが生み出した近現代史の構造が、移民の運命を翻弄しつづけたかのようですらある。だが結果として、20世紀アメリカの新移民は、白人の特権を手に入れた。第二次世界大戦に従軍した移民二世の多くは、戦後GI権利章典（軍人恩給）の手厚い恩恵を受け、また、「豊かな社会」の経済発展の中で中産階級化していく⁽⁵³⁾。彼らは「白い」郊外の住人となり、ついにボハックスではなく「普通の人間」になった。しかし、それは、かつて彼らの父祖が住んだ産業都市に「ダーク・ゲットー」（有色の貧困地区）を残置することと引き換えに叶った夢であり、その代償はいったい誰が支払うのかという重い問いを残したままの旅立ちだった⁽⁵⁴⁾。

（なかの・こうたろう 東京大学大学院総合文化研究科教授）

(51) Roediger, *Working Toward Whiteness*, p. 136.

(52) Steve Fraser, *Labor Will Rule: Sidney Hillman and the Rise of American Labor* (New York: Free Press, 1991).

(53) Lizabeth Cohen, *A Consumer's Republic: The Politics of Mass Consumption in Postwar America* (New York: Alfred Knopf, 2003).

(54) Kenneth B. Clark, *Dark Ghetto: Dilemmas of Social Power* (New York: Harper & Row, 1965).